

〈読書の発見〉ライトノベルは教材になるか



蝉川夏哉 (せみかわなつや)

1983年大阪府生まれ。大阪市立大学文学部卒。会社勤めの傍ら、『邪神に転生したら配下の魔王軍がさっそく滅亡しそうなんだが、どうすればいいんだろうか』(アルファポリス)でデビュー。6月にその続編を刊行。

◆そもそもライトノベルって、どんな本？

- ・ライトノベルは、日本のサブカルチャーの中で生まれた小説の分類分けの一つ。英単語の **Light** と **Novel** を組み合わせた和製英語。
 - ・表紙や挿絵にアニメ調のイラストを多用している若年層向けの小説。
 - ・中学生～高校生という主なターゲットにおいて読みやすく書かれた娯楽小説。
- 但しこれらはあくまでも一説で、出版社でも明確な定義は存在していない。

◆現代文は題材としてライトノベルを扱うことができるか？

- ・文部科学省の学習指導要領において現代文は「近代以降の優れた文章や作品を読解し鑑賞する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで表現し読書することによって人生を豊かにする態度を育てる」を目的としている。
- 現代文の定義から言えばライトノベルを教材として扱うことは可能である。

◆中島敦「山月記」を例に考える。

- ・「山月記」の元となったのは唐代に成立した「人虎伝」
- ・テーマの変遷と「本歌取り」
「人虎伝」では因果応報の要素を含んだ怪異譚であったものが、中島敦によって「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という「人間の心の在り方」の問題へと扱う問題の変更が行われている。

◆「山月記」をライトノベルに書き改めると？

- ・中島敦が行ったよりも大きな改変が必要になる。
 - ・対象読者である若い子に訴えかける為には、若い子の求める物語にする必要がある。
- 女性キャラクターの投入と、物語の構成の変更 (別紙参照)

◆ライトノベルを教材として扱うべきか？

(別紙) ライトノベルは教材になるか

未明の森を数騎の馬が駆けている。

朝の湿りを帯びたねつとりと重い闇の中、蹄の音だけが高く響く。

虎に、追われていた。鞍上の袁参を本来守るべき供回りは一度目の襲撃でみな散り散りになってしまい、これだけしか残っていない。

袁参は掌に血が滲むほど手綱を強く握り、馬腹を足で絞め続けていた。そうしていないと、思わず叫び出しそうになるのだ。叢の中から炯々とした虎の眼が、今でもこちらを窺っている気がする。

「くそつ、あの時、忠告さえ聞いておけば……」

この道には人食い虎が出る。その事はこちらに来る途中、商於の街で聞かされていたことだった。若くして観察御史に任じられた袁参は帝の勅を奉じて嶺南に赴く任務に逸る余り、この警告を無視して道を急いだのだ。

低く唸る虎の声が背後に迫る。気付けば一騎、また一騎と周囲の部下の数が減っている。人食い虎の餌食になってしまったのか、それとも逃げだしたのか。

歯の根が噛み合わない。袁参には、首筋に生温かい虎の吐息さえ感じられるようだ。

そのとき不意に、虎の気配が変わった。

今までの獲物を狙う獣のそれは霧消し、代わりにどこか懐かしい雰囲気すら感じられる。

「危ない所だった……」

凜とした、女の声だ。歳を経た虎には人語を解す化生となる者もあるという。だが、袁参にはこの声音に聞き覚えがあった。

「その声は……李淑、李淑じゃないのか？」

◎中島敦『山月記』をライトノベルに「本歌取り」する

◆ライトノベルの主たる読者である中高生に受け入れられるようにするには？

- ・主人公(視点)を袁参に固定し、感情移入の対象とする。
- ・李徴の立場、詩作に没入するあまり虎になってしまう人物(李淑)を女性に改める。
- ・虎になってしまった李淑を元に戻そうと奮闘する怪異譚に改める。

◆『山月記』の根幹である、「何故李徴は虎になってしまったか」をどうするか？

・この部分については「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせい」のままにする。

↓この心の在り様は二〇一〇年代の今の子どもにも通底するもので、むしろ今こそ問題とすべきであると考えながら。

◆エンターテイメント性をどう担保するか？

『山海経』などをはじめとした中国古典に登場する怪力乱神の類いとのかいを、知恵と勇気で乗り越えていく冒険譚として、袁参と李淑のラブロマンスを含めながら十二万字程度で纏める。